優秀賞

「永遠のライバル」

愛知県
名古屋市立村雲小学校 三年
尾藤 和歌

お姉ちゃんを前にして「ありがとう。」だなんて、絶対に言いたくない。だって、お姉ちゃんは私のライバルだから。

お姉ちゃんは今、中学一年生。で、たった一人の妹、私は小学三年生。お姉ちゃんは、いつもみんなを笑わせるのが得意で人気者だし、勉強もよくできる。

でも、負けたくない。

私が小学校に入学した頃、お姉ちゃんが、「社会科って、歴史の年代とか人物名とか、いろんな国の名前とか暗記ばっかりで、ちょっと苦手かも。」とポロっと言ったことがあった。それに、絵を描くのも好きではない。そんなことを意識したからかは自分でもわからないけど、私はお姉ちゃんがあまり得意じゃないものが得意だったりする。

日本の歴史は家のかべに貼ってある年表を毎日見ていたら、だいたい暗記できた。トイレに貼ってある世界地図も何度も見るから、国とその首都の名前を百五十か国くらい覚えた。絵を描くのは、私も自分としてはあまり好きじゃないんだけど、お姉ちゃんよりは人から上手って言ってもらえる。

毎日、お姉ちゃんの答えられなさそうな問題を作ってだ出す。とくに、お風呂に入っている時。お姉ちゃんがわからなくてトンチンカンな答えを言う時が、とってもおもしろい。

「アルジェリアの首都はアルジェ、ではナイジェリアの首都は？」

「ナイジェ。」

「ブーッ。そう言うと思った。アブジャだわ。」

「承久の乱で幕府にやぶれた後鳥羽上皇は、どこに流されたでしょう。」

「おき。」

「ピンポン。ちぇっ、すごいじゃん。何でそんなの知っとったのぉ。」

「えっ合っとるの？へんな問題。流されるっていったら、おきに決まってるじゃんね。」

お姉ちゃんは、正解の隠岐じゃなくて、沖だと冗談半分で答えていたのだ。

毎日こんな調子でお姉ちゃんと遊んでいたある日、お姉ちゃんが中学から帰ってきたら、「和歌ちゃん！社会の中間テスト、お姉ちゃんだけ百点だったよ。ありがとう！」って、すごくうれしそうに言った。ありがとうって言われたこともあるのかな。それよりもたぶん、お姉ちゃんが、むずかしい中学の社会のテストで百点とれたことがうれしかった。ライバルなのに。でもライバルだから、「ふん、つまらん。百点なんてとって。」なんて言ってしまった。お姉ちゃん、おこるかなって思ったら、『べえっ。』とおもしろい顔をさせてわらっていた。私ももっとへんな顔をつくって、お姉ちゃんに見せてやった。

お姉ちゃんは私に、「ありがとう。」って言ってくれる。でも私はお姉ちゃんに「ありがとう。」だなんて言わない。

でもね、お姉ちゃん。ありがとう。